

幼兒期の情意教育に就て (三)

大塚喜一

結語

幼兒期の意育に就て、小生がこれ迄見聞せるもの、中最も適切と思はるゝのは、我が國幼兒教育界の權威者倉橋先生の「幼兒教育原論」の講習中の一節である。本講に於て先生は、幼兒教育の主標的として

目的性 没頭性 共感性 衆を楽しむ心 高めらるゝ心

の五項を擧げられ、更に是等に到達する爲め、幼兒保育法の原則として

具體 相互 共鳴 機會捕捉 の四原則

を擧げてゐられる。其中、幼兒の具體的生活を保育して其目的性没頭性を涵養する事は、早教育の要所を指示すると共に其弊を注告せるの觀があり、早教育に關する種々の學說や實際を批判するに善き標準を示されたりと感謝する次第である。依て以下此方面に就て其主旨の概要を述べて本文を結ばふと思ふ。

凡そ幼兒は一般にたやすく物に興味を感じ又熱中する。しかも彼等は、自己の活動を爲し遂ぐる事を直接目的として之に没頭し、大人の如く結果を願はうとしない。幼兒の生活はたとひ禁ぜられても、又損でも、して見たい、したくてたまらぬ、せずには居れぬといふ衝動や欲求に依て動いてゐる。

在來自發活動を尊重する論者は、幼兒の生活の出發點が自發的なる事にのみ着眼し之を過重視せる弊として、餘りに幼兒の生活を奔放不羈ホンポウフキならしめた嫌があつた。然し幼兒の生活は短いながらも或る到達點を有するものである。自發活動の真相は、出發點が自發的なるのみならず到達點をも自發的に意識して之に達せんと努めてゐる所に存する。幼兒期に於て、一度自發的に企てた目的はあくまでも到達せずば止まぬといふ性質を保育する事は、將來の意育の大切なる萌芽であり基礎である。

次に、生活の出發點より目的に到達する迄の過程に着眼する時は、幼兒教育の主標的として「没頭性」(又は眞劍・熱心)が擧げられる。其意は生活の總ての瞬間に於て當面の事に没頭する事である。これは人間生活上極めて大切な態度であるが、大人は容易に斯く爲り得ない。そは何故であるかを裏から考へて見ると大體次の二つの理由によると思はれる。

一、生活を手段として間接目的の爲にするからである。従つて結果を願ひ、之を意識する事に依て自己を鞭撻しつゝ漸く進むといふ状態となる。

しかし子供の生活は決して左様なものではない。例へば子供が「蟬を取らう」と企てた時は、初めは

其目的を意識して出發したのであるが、愈々網を持つて樹々の間をかき分けて蟬の聲のする方へくへ行くと、蟬を取るといふ結果よりも、それに至る過程を爲せる一々の活動の單位或は要素を樂んでゐるのである。更に切言すれば、その過程に子供の力量相應の困難や障害のある方が却て之に打ち勝つ愉快さを覺えしめて、遊びの興味は一段と増すとさへ思はれるのである。

註 Adolf Berle,——The School in the Home 2nd Edition chapt. VIII. Training of the Will

p. 165 446

「人間の能力を左右する分明にして顯著なる力は堅忍の力に若くものはない。人生に於て何か偉業を爲し、又は其性格に於て其慧智に於て、普通人より優れたる人々を通觀するに、概括的に云へば斯かる人々は如何にして堅忍すべきかを知つてゐる。即ち只彼等の意志力が發達して、能く其心に保持せる事物を終極の成功に迄持來するを得るのである。然るに其他の多くの人々は智識の不足せるよりも寧ろ意志力の不足せるを以て失敗するのである。」

二、自意識の分離

大人が自己の生活に没頭し得ざる第二の理由は、「生活する我」と「之を客觀的に見る我」とが自己の心の中で分離する事である。自己の意識に訴へて反省する事は青年期以後の教育に於て爲すべき事であつて、幼兒期に爲すべき事ではない。

全自我を没頭して一生懸命に砂遊びを爲せる一團の幼児達を見よ！ 感ずべくして云ふべからざる或る大なる力が此の幼児達を動かして各自の生活に没頭せしめ、且今や芽生えつゝある相互生活を進展せしめて居る如く思はれる。幼児達は全く我を忘れて其本來の面目なる「神性」のまゝに動いてゐる。一度この光景に接して畏敬の念を起せる者は、決して無用にこの天使達の遊びを妨害せないであらう。子供に馴れ親みて共に遊ぶ者は、子供の生活に斯くも尊敬すべき方面あるを思ひ、自己の氣分に任せて有害無益に干渉する事を深く慎まねばならぬ。

「自己に忠實なれ」とは「自己の爲めに選みたる目的に没頭せよ」との意である。大人は理智に依て自己の目的を**選**む事は出来るが、扱て愈々之に没頭せんとしても幼児の如く無我に爲り得ず、絶えず之を自意識する心が出て來て、或は現在の勞苦を嫌ひ、或は一の努力を以て十の結果を願ひまするに至るものである。

没頭すべき價值あるものに接したからとて直ちに没頭し得るものではない。没頭せざらんと欲するも能はずして**よ性格の習慣**である。それだから基本教育たる幼兒期に於て此性格の習慣を養ふて置かねばならぬのである。成長した後始めて氣付いてもかゝる性格を獲得せんとするは極めて困難である。社會の荒浪を乗り切つて自己の意志を貫徹する力は、實に幼兒の長所たる没頭性の保護と鍛練とに依て養はれるものである。

註、かゝる考へに就て豫想せらるゝ反對説は、左様に幼兒期に自己の好む所にのみ没頭する様習慣付けられたる者は、成長の後周圍の事情も他人の注告をも顧ずして自己の好む所にのみ熱中する如き性格を作りはしないかと云ふ事である。しかしかゝる憂は「一時期の生活を完成する事が即ち次の時期の生活へ進展する素地である。」との原理に思ひ至らば自ら解決するであらう。子供が其時期に特有する遊び——即ち生活——に眞劍に没頭する様を大人の世界に於て比較を求むるならば、自己の本務に獻身的に孜々營々として勉むる人に比すべきであつて、決して自我の逸樂に耽溺する狀に比すべきではない。幼時に没頭性を教養されたる人は、意識的に或る職務・事業等に努力し始めてから、遂に之を没頭して最も自己の好む趣味と同様に之を愛好する迄に至る間に要する時は、没頭性を養はれざる人よりは遙に短いであらう。

扱て、斯かる没頭性を教養するに際して準據すべき規範として、幼兒教育法の原則中最も大切なる「具體の原則」に就て述べやう。

元來、幼兒の生活は未分化的融合的なるものである。此事は年齢が幼い程著しい。此自然に副はんが爲めには、幼兒教育の方法は具體的であらねばならぬ。

教育は盡く徹底を求むるが、これが爲めに抽象的方法に依らねばならぬと考ふるに至らば、幼兒教育に於ても或る選み出されたる特定の効果を收めむとする爲め、其點にのみ力を注ぐ結果、生活全體の渾

成を破る危険がある。

部分的に一能力一作業の徹底は表はれなくても止むを得ぬが、具體的徹底を期すべく努力すべきである。こゝに幼児教育獨特の難しい所がある。

今、茲に云ふ「具體的方法」を明かならしめんが爲め、教育の方法を具體的ならしめないものは何か？と裏から考へて見ると、大體次の三つが考へられる。(詳細を略す)

一、被教育特殊意識 (幼兒をして「今教育されてゐる」と明に意識せしむる様ならば「具體」を損ふ)

二、生活の法則化

三、生活の概念化

この三項は昔から教育の必要條件の如くに、之を與へるのが教育であるかの如くに考へられてゐた。成程教へんが爲め、形式を與へんが爲めには斯くする事が便利であらうが、是等は何れも幼兒の具體生活を損ふものである。

凡そ、或る時期に於て教育されつゝある環境或は状態と、その時期の教育を卒へたる後の生活相とは明かに區別すべきである。「具體」の眞意は生活の意義・目的・輪廓等を離れて生活の實質そのものに没頭する事であるが、幼兒期に於て斯かる没頭性即ち生活の力強さが充分に鍛はれて置けば、年長じて後被教育意識を起させる如き、又は生活を法則化し概念化する如き形式を與へられても、一度その没頭性を

發揮し來る時は渾然たる三昧の境に入る事を得る。是實に偉人や天才の面影ではないか。

斯くして幼児保育法の原則を遵守する事に依り、其後の生活を圓滿ならしめ、種々の具體案的教育も其弊を受くる事無くして之を生活に融合せしめ得るであらう。

幼稚園懷舊談話會

來る十一月廿九日 東京女子高等師範學校記念日をとし 幼稚園懷舊談話會を同日

午後二時 より附屬幼稚園遊戯室に於て開會いたします。當日は我が國幼稚園創立當時の保

姆でありました豊田英雄子先生、更に小西信八先生、氏原銀子先生、膳真規子先生、下田田鶴子先生等の方々に御出席を御願して、それ／＼當時の幼稚園懷舊談をして頂く豫定であります。聽講は無料でありますから多數御誘ひ御出席下さることを希望いたします。

昭和三年十月三十日

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

主催者 日本幼稚園協會